

2012 年度第 6 回全体研究会

「エンゲイジド・ブディズムの潮流」 (第 3 回)

(協賛：龍谷学会・龍谷大学仏教史学専攻)

報告題目	仏教と経済学——エンゲイジド・ブディズムへの道を考える
開催日時	2012 年 10 月 4 日 (木) 10:45–12:15
開催場所	龍谷大学大宮学舎東翼 203 教室
報告者	福田邦夫 (明治大学商学部教授)
ファシリテーター	佐藤智水 (龍谷大学文学部教授)
コメンテーター	丸山徳次 (龍谷大学文学部教授) 藤 能成 (龍谷大学文学部教授)
参加者	78 人

【報告のポイント】

我々をとりまく経済の有様について理解をしておかないとエンゲイジド・ブディズムへの道が開けない。福田氏は、日本経済の構造的問題を指摘し、その上で、経済学は、元来いかにすれば人間が幸せに生きることができるかを研究するものであり、仏教はその思考・倫理基準を提供するものであると述べた。

【報告の概要】

福田氏は、はじめに戦後の日本経済を概観した。氏によれば、1955 年から 1973 年までの日本は、基本的に国内で物を製造し国内で消費する時代であった。日本が福祉国家形成戦略を唱えた 1973 年に始まり、1980 年までは、国内で物を消費できなくなり輸出が増大し、日米経済摩擦が起き、日本は「貿易大国」であるという神話が形成された。1980 年以降は、国内で物を製造せず、労働力が安価な東南アジアなどで製造し世界中に販売する、いわゆる日本経済の「空洞化」が起き、現在はその最終段階にあるとする。そうした経済構造に言及せずに、ただ日本が貿易赤字に転落したという理由で原発再稼働を主張する論を福田氏は批判する。

以上のように日本経済の現状分析を行った後、福田氏は本来の経済学とは何かについて論じた。氏によれば、現在の日本において主流の経済学は、人間を計算可能な存在として

数量化するアメリカ直輸入のものであり、人間がトータルでいかによりよく生きられるかを問わないことに大きな問題がある。経済学の語源は Oikos Nomos であるが、Oikos は共同体、Nomos はやりくりするという意味で、同じ屋根の下で生まれた人間がいかに幸せに生きていけるかを考えるのが本来の経済学であるとする。その上で、氏は人間の生存の基本的条件を認めない社会を許している制度・システムを批判するのが経済学であると述べた経済学者、河上肇の論に賛同する。そして、仏教は、自身が苦しみに晒されている人と無関係ではないことに気付かせてくれる存在であり、また、全ての人達が人間らしく社会倫理に準拠した形で生活や研究をしていく思考・倫理基準を提供するものであるとする。

以上、福田氏の報告は、現代日本経済がおかれている状況を明らかにし、そこにおいて仏教の果たすべき役割を示唆するものであった。



【議論の概要】

丸山徳次氏は以下の三点を指摘する。第一に、経済学も哲学から生み出されたものだが、アリストテレスはのちの「経済学」の語源となる「家政術」(oikonomike)を確かに家から国家共同体に至るまでの生活維持・秩序維持についての学として提唱したが、これに対しては、貨幣のために貨幣を追求する「取財術」(kremastike)を区別し、すでに貨幣の追求が自己目的化する危険性を述べていたことを指摘する。第二に、自身は環境哲学者として水俣病事件も研究してきたが、水俣病に象徴されるように一部の人々の犠牲の上に経済成長が実現されることは不正であり、そうではないあり方として「持続可能性」(sustainability)を追求する必要がある、「経済成長」というとき、「物的増大」という意味での growth で

はなく、「質的改善」という意味での development という捉え方をすべきであり、欲望の肥大化に伴う大量生産・大量消費・大量廃棄を抑制する仕組みを経済に導入すべきという環境経済学の議論もあるとする。第三に、「仏教と経済学」と聞くと、仏教経済学を提唱したシューマッハーを想起するが、その著『スモール イズ ビューティフル』の中で彼は労働と資源の意味を再考している。つまり、労働は単なる生きる手段ではなく、それによって我々自身が自己実現し社会から承認される重要な活動であり、また、資源には再生可能なものと不可能なものがあり、無際限に資源を収奪することは許されないとする。さらに、原発に対してもシューマッハーは特に解決不可能な放射性廃棄物の故に厳しく批判しており、丸山氏は彼を再評価する必要があるとする。

藤能成氏は、人間を自己利益のみに従って行動する合理的な存在とみなす近代経済学について、出発点から誤っているとする。藤氏によれば、現代日本の学校教育は科学主義に基づいており、宗教のような目に見えない存在を信じることを教えず、競争に勝ち、自己の欲望を満たすことを教えてきたが、それでは本当の幸せは得られないという。人間は他人を幸せにし、社会に役立つかけがえのない存在となるような人生の目的と意味を見つけることで幸せを得られ、そのためには仏教が必要であると藤氏は主張する。

桂紹隆氏は、仏教がモラルを提供すべきだという福田氏の論は考慮すべき的確な提案だとする。ただし、果たして現代日本仏教がモラルを提供できるのかは大きな問題で、日本仏教がモラルをどのように考えてきたかも難しいが、エンゲイジド・ブディズムがその点を示唆しているとする。また、アメリカの哲学者トゥルミンが 1953 年の段階ですでに全ての事象を記号化・数値化できると考えるのは誤りだと主張していたことも指摘した。

フロアからは、過去の日本の経済成長の評価と、今後の方向性について質問がなされた。それに対し、福田氏は、貨幣的富の獲得のみをよしとする思想やグローバリゼーションが、日本の就農人口 3% に象徴される事態を招いているのであり、企業を中心とする一部の人間達の富を保証するシステムは何であるのかを真剣に検証するところから始めるしかなく、現在の豊かさは何を犠牲にして成り立っているか、失ったものは何かを改めて考えなければならないと答えた。